論文の和文要旨

論文題目	源氏物語探究 —ヒロインたちの栄華と物語のトポロジー—
氏　名	於　国　瑛

本論文は『源氏物語』におけるヒロインたちの栄華と救済を考察してみた。女性たちの栄華と救済は彼女らを物語るトポロジーと深く関わる。ヒロインの一人である明石君と一族はなぜ絶大な栄華を獲得したかという根本的な原因を追究し、それはどのヒロインとも異なる奇特なトポスに由来したものと考える。さらにもう一つの「ゆかり」の系譜のヒロインたちも、「空」「雲」「山」といったトポスと深く関わることを主張した論である。全体を八章で構成した。

序章は、まずトポロジー・トポスという概念を説明した。『源氏物語』までのフレ物語や作り物語におけるトポロジーの特徴を概観し、基本的には二つのパターンのトポスが存在することを示した。つまり、羽衣型・白鳥処女型の「空」に対応して、地上にも「山中の他界」や「海上の他界」というトポロジーの存在を指摘した。ヒーローは想像力を駆り立てて、そういうトポスに視線を投げかけてから、ヒロインたちと関連するのである。トポスに注いだ視線は、ヒロインの奇異さを寄って見る視線と、優美で情動を誘った「垣間見」の視線という二通りに分けられる。『源氏物語』までの作り物語ではそういった視線が一人のヒロインに統一されて未分離であったが、『源氏物語』に至ると、二つの系譜の「ゆかり」に対応して視線構造も二通りに分化されたことを確認しておいた。絶大な栄華のヒロインを語るには、想像力を働かせ、不可思議さゆえに寄って見るという視線構造を必要とさせる特異なトポスがなければならないと思う。

第一章からは本論に入っていくが、『源氏物語』は中国の唐代詩人白楽天の詩、特に「長恨歌」から大きな影響を受けた。ゆえに和漢比較文学研究の視点も有効であろう。首巻では桐壺更衣が桐壺帝から無上の寵愛を受けたことで、楊貴妃のゆかりとなった。桐壺更衣が亡くなった後に、藤壺が容貌の類似で「ゆかり」の系譜を受け、さらには紫上によって受け継がれていった。

もう一つは、楊氏一族の専横ぶりのように一人の女性の運命に一族の栄華を託す形で「ゆかり」を形成した。これは「心高さ」を鍵に、一人娘を抱える祖孫三代を語るところに特徴がある。紫上の祖母や葵上の母大宮などの言動とも対比して追究してみたところ、明石一族、特に明石入道の、娘や孫の栄華に燃やした執心は特別であり、楊貴妃→桐壺更衣→明石君という「族のゆかり」の系譜がテクストの中で形成されていることが明らかにできた。ゆえに、『源氏物語』において、桐壺更衣はヒロインたちの「ゆかり」の系譜の原点であることを改めて確認できたと思う。

二つの「ゆかり」の系譜の継承に照応しながら、物語のトポロジーも全編を貫いて二通りに分化している。「紫のゆかり」の系譜は愛による栄華の主題を貫く。空は魂の温存するトポスである。明石一族は、〈族〉、〈身分〉、そして何より明石というトポスの三つの要素によって栄華を保証し得たと言える。

第二章では、明石というトポスの特性を主に考察してみた。最初に光源氏にとって重要な二人のヒロイン、紫上と明石君が、なぜ若紫巻において同時に語りだされる必要があったのかを見た。光源氏は優美で情動的な「垣間見」の視線を注ぎ、若紫の発見へとつながった。もう一方、明石君の噂話は北山の高所に立ってから語り出された。明石のトポスが見えないはずなのに想像力を駆り立てて目の前に現れたかのように幻視される。そういった語りの方法は実は中日文献に表れる壺のトポスで複数の女性が登場する書き方と共通性を持っていると考えた。

そして、明石についての語りが、しばしば絵と付き合わせながら進められたことの深層を探った。トポスは想像力に密接に関連する。想像力の産物は現代では発達したメディアの機能を活用して様々に展開するが、古代文学では〈絵〉の映像を借りて実現した。明石のトポスはよく〈絵〉と関連して蓬莱の世界に統一されたと思う。つまり、〈蓬莱〉の絵によって、絵師の業績で記憶されたものによって、「長恨歌絵」の楊貴妃の仙界と桐壺更衣の魂の在りかが一直線に結びつき、深層に潜み続ける。

さらに、明石物語に散在する「海山」の用例を分析して明石のトポスの特性を続けて考察した。須磨巻において、「海山」のコトバが出る所は、白楽天、菅原道真などの詩人の詩を摂取消化した箇所である。また作者紫式部が父藤原為時の詩を意識したところでもある。「海山」は白楽天の「答客説」の詩に表れ、『太平広記』の逸史の中では「海山」は即ち「蓬莱院」だということが記されている。白楽天は「海山」より須弥山に興味を持つ姿勢を示した。須弥山とは明石一族の栄華の根拠、即ち明石入道の夢の規約された内容である。ゆえに、源氏が西の明石へ運命的に向かった。明石のトポスが「海山」であり、蓬莱及び須弥山と親和性を示していると見られよう。

第三章では、明石一族の栄華はどうして明石入道の夢に規制されたのかを考察していく。夢の中に「山をば海に浮べおきて」という内容があり、それは明石一族の栄華のシンボルとして読み解かれる。須磨、明石巻では、明石君は〈海〉に規定されたのに対して、明石入道は「山がつ」と呼ばれ、始終〈山〉と深く関わった。ゆえに、明石君は〈海に根ざした〉女と読みとれるし、父の〈山〉との関わり方によって、明石一族の栄華は「山をば海中に浮かべおきて」という喩に象徴されている。さらに明石君は大堰山荘に入った後、「海」に規定された属性からいち早く「山里人」に変貌した。明石君は続けて「明石××」という呼称で呼ばれていく。〈海〉の特性を有しながらも、「山里人」になったため、名実とも蓬莱山や須弥山の象徴した「海中の山」と親近する。〈海〉に規定された時は〈海〉に根ざす女の属性を持つ。「山里人」になり、明石君は名実とも海に入らぬ女となった。

明石のトポスは「海」「山」と密接な関わりを持っている。明石一族の絶大な栄華は明石君の生涯において転々とした住まいが蓬莱的世界と深く関わるからである。

第四章は、明石から大堰山荘を経て六条院に至るまでの明石君と龍との関わりを論じたものである。北山（山）から明石（海）へ、また大堰山荘（山）へ、さらに山水を構

える四方四季の竜宮城へというコースを辿って明石一族の栄華のトポスが保証された。この四つのトポスはともに蓬莱と深く関わる。すべて「海の中の山」という聖なる形を持つ。龍宮譚はよく山から水辺の世界へ転入して発生する。明石君は龍女だからこそ、〈北山〉—明石の浦（海山・蓬莱・龍宮）—大堰山荘（亀山の麓）—六条院（四方四季の地上楽園・蓬莱の中島・須弥山）という図式がその場に通底し、それによって明石一族が光源氏の栄華に組み込まれることができた。だから四方四季の竜宮城である六条院に入った明石君は、まさに「海龍王の后」として君臨していたと証される。

第五章では、六条院におけるほかのヒロインたちと比べ、特に紫上と比較して、六条院における明石君の唐風の特質及び源氏の栄華などの面からヒロインたちの栄華のあり方を考えてみた。六条院が四神相応という造園方法に由来することは常識であろうが、小論は、特にトポロジーに重点を置き、東南町が「仏の国」に喩えられた点に着眼し、「仏の国」が須弥山であるため、「中島」が蓬莱にも通ずるし、明石の栄華のシンボルが一貫しているという見解を述べた。そういうトポスの特性を持つからこそ明石君の異文化的な特質はことごとく体現されたのだろう。

第六章では、「紫のゆかり」の系譜は「山」「雲」「空」などのトポロジーと深く関わることを検証してみた。この系譜は楊貴妃から、桐壺更衣、藤壺、紫上へと継続され、さらには後編の大君、浮舟の「宇治のゆかり」まで長い射程を持った。その系譜を語り続けるために、求めても得られぬ女人の魂のかわりに現実の人間を登場させるという「ゆかり」の方法を使ったのである。「長恨歌」では男と女はそれぞれ蓬莱山と都に隔てられても、二人ともお互いに相手を思い、永遠の契りを希求していた。しかし日本の受容では桐壺帝、光源氏及び薫などのヒーローとヒロインたちとの愛は、むしろ「失はれた愛に対する嘆き」が主題である特徴を持った。お互いにどのように隔てられるのか、或いはいかにその亡き魂を求めて愛を続けていくかが眼目である。結局男性は想う女性に先立たれ、空を眺めたり、雲を形見として思いを寄せたりした。後編に至ると、ヒロインたちは段々と峰及び山の上の空に目を向けていく。自己を凝視することにより、夢を常に意識し、そういう「空」は「空の果て」を、「山」や「峰」は「空に近付いた峰」を意識するようになった。また「空」は「雲」のかかるトポス、或いは「雲」によって男女の関係が隔てられたトポスと言えよう。

最後の第七章は、二つの系譜の問題、即ち愛の主題を語る「紫のゆかり」と一族の栄華の「族のゆかり」をいかに後編のヒロインたちによって継承されて物語の終焉に向かわせたかを検討してみた。「宇治のゆかり」の物語に総括されたかのように空に昇った魂が男達に求めつづけられる。物語の終焉では「入水」、「出家」の類同表現によって明石一族の「族のゆかり」の系譜も引き継がれていく。浮舟のヒロインはこの二面性をうまく融合している。ただ宇治十帖全体は人間の発心を克明に追求するところに特徴を持つようになった。

「空」には愛する女性を求める男の通路としての「夢の浮橋」が架かり、山も極楽浄土へと変貌している。作者は蓬莱山への通路としての「夢の浮橋」を最後まで追求しつづけた。それは栄華のトポスであり、亡くなった人々の魂の在り処でもある。だが、最後には浮舟が男性の愛を拒否したことで「夢の浮橋」が雲に隔てられて極楽浄土への通路になれるかどうかは明らかにされていない。浮舟は一旦俗世に返る欲念とつながるな

らば、雲に多用される明石一族の後裔匂宮との架橋はありうると推測した。

以上、小論の提示した論点は中世の源氏学を経て末長く受け継がれている「夢の浮橋」の系譜によって証明される。そのことを付論して結びに代えた。享受のよき結晶としては江戸初期、山雪の描いた『長恨歌絵巻』がある。白楽天の「長恨歌」「長恨歌伝」の本文には元来橋がなかったはずだが、大きな「夢の浮橋」が蓬莱仙山の上に架けられている。蓬莱仙山は作者の求めた女性の栄華と救済の永遠なトポスであり、「夢の浮橋」は男性が女性の魂を求めつづける通路である。『源氏物語』のトポロジーの究極の姿をここに見るのである。